**世阿弥研究会　18年　9月25日(火)　概要の報告と次回の予定に関して**

目次

一、河村博重先生のお話 1～3頁

1、『野宮』に関して 1～2頁

2、「京都観世会十一月例会」に関して 2頁

3、お薦めの本に関して 2～3頁

4、藤田六郎兵衛さん(64歳)の訃報に関して 3頁

二、『世阿弥能楽論集』「花鏡」の講読 3～6頁

1、「万能綰二一心一事」(万能を一心につなぐこと)(219頁後ろから2行目～221頁10行目) 3～4頁

2、現実の演技論にまつわる話 4～5頁

3、鎌田先生の「こころの科学入門」にまつわる話題 5頁

4、これからの生き方・逝き方について 5～6頁

5、身心変容技法研究会の図について 6頁

6、先生の雰囲気、環境と教育について 6頁

7、次回の日程について 7頁

三、感想および考察と次回の予定に関して 7頁

参考文献・資料一覧 8～9頁

**一、****河村博重先生のお話**

**1、『野宮』に関して**

冒頭では、河村博重先生より9月に片山定期能で「野宮　合掌留」を舞われた際のお話を伺い、その際に先生が掛けられた「深井」の面を見せて頂きました。

『野宮』という曲は『源氏物語』の曲で、六条御息所の亡霊が前シテで、後シテは六条御息所で、六条御息所は非常にブルジョアというか非常に気が強い女性だそうです。

場所は嵯峨の野宮神社黒木の鳥居で、娘が斎女となる、天皇の妻みたいになるので暫くそこで禊をして勉強をすることになったために、それに母親が付いて行って、正妻が葵上の光源氏と別れた六条御息所はそこを清めてご神事をしている時に、9月7日の日に光源氏が訪ねて来るそうです。

思い出の日にやって来て、前場はそこで、場所を清めてご神事をしている。

後は加茂の祭り、時代祭りの車争いのところを再現したりしてしっとりした舞いを舞って、途中から、きりっとした舞いを舞って、そしてまた車に乗って帰って来るというものだそうで、全体で2時間5分かかったそうです。

この面は、河村家の面で2・3年前に河村隆司氏から譲り受けたもので、古作であり物凄く意識を持っていて、ちょっと怖いぐらい、というお話がありました。

母親の面で、子どもが斎宮に行ったので、プライドが高くて、嫉妬が深くて、気が強いのが特徴だそうです。

**2、「京都観世会十一月例会」に関して**

そして「京都観世会十一月例会」のご案内もありました。

河村博重先生はこの中で、13時過ぎから二曲目の〈能〉富士太鼓を舞われます。

後見は片山九郎右衛門先生と味方玄先生で、地謡には河村晴道先生や青木道喜先生も出られます。

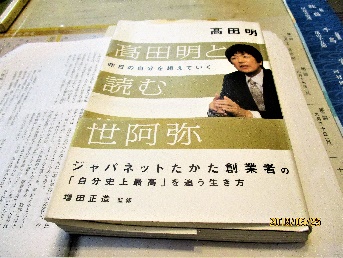


**3、お薦めの本に関して**

また当日の話題の中では、能に関する河村博重先生お薦めの本の紹介も3冊ありました。

1. 高田明著『高田明と読む世阿弥　昨日の自分を超えていく』日経BP社, 2018.
2. 安田登著『異界を旅する能　ワキという存在』(ちくま文庫),筑摩書房, 2011.
3. 矢追純一著『カラスの死骸はなぜ見あたらないのか―あなたの常識がひっくり返る本』

雄鶏社,1993.



追加情報

1の高田明氏の書籍に関しては今年、「日経ビジネスonline」の方では18年5月1日(火)に

髙田明「自分の後ろ姿を見ることはできない　どうしたら相手の視点になれるか」という記事も書かれておりました。https://business.nikkeibp.co.jp/atcl/opinion/16nv/032200016/042500006/

こちらも併せてご参照ください。

**4、藤田六郎兵衛さん(64歳)の訃報に関して**

あと5年くらいしたら人間国宝になりそうな力量とお立場の方だったそうで、源次郎先生から習われていた方だったということです。

河村博重先生も九州で『石橋』を1回吹いてもらったことがおありだそうです。

**二、『世阿弥能楽論集』「花鏡」の講読**

**1、「万能綰二一心一事」(万能を一心につなぐこと)(219頁後ろから2行目～221頁10行目)**

ここでは鎌田先生から、以下のような話題が展開され見解が示されていました。

まず、これは世阿弥の『花鏡』の最も重要な一節であるそうで、「極意の中の極意であり、全てにおいて制作意図とか表現意図とかがあるけれども、たとえば論文を書く場合にも意図を明確にして問題意識を「ばちっ」と出してそれを説得的に論じきるとか表現をしきると一定の評価を得るものだという話題が展開をされていました。

ところで、世阿弥が言っているのは、そういうlevelでは合格ラインに達したとしても奥には達しておらず、一番の奥は何かと言えば、しないようでしているという「せぬところ」が「面白い」。しないという仕方をしているということだそうです。

「しないようにする」ということは「一種の矛盾」・「paradox」であるのだが、あらゆる芸能は表現をするけれども、その表現意図が見え過ぎた時に人は、「この程度のものなのか」と、興醒めする訳であるが、神秘というものを感じて、人がそこから深い感動に至る時には、その神秘がある。

「幽玄」というのもその神秘の1つであり「妙」というのもそういう神秘の1つである訳だけれど、舞台にも芸術にも表現にも宗教にも神秘がなければならない。

だけどその「神秘」はどうやって現れ出るのかと言ったら世阿弥の言い方を借りると意図しないで深く意図するというものがなければならず、「意図するところには神秘は生まれないんだ」と。でも意図していることが自分にも見えたら駄目だし、相手にも見えたら駄目である。

自分に気付かない程の深いところの「意図(糸)」みたいなものがなければならないのであって、表現者はあらゆるところまで気配りをして、ある境地というのか、その表現の段階を究めることが必要である。



**2、****現実の演技論にまつわる話**

ここから話題は現実のfigure skateの選手の素晴らしい演技論へと展開されます。

人々に対して感動を与える素晴らしい演技というのは選手も、普段から物凄く練習をして意図を極めて、これを実現しなきゃいけないというくらいに持って行く訳であるけれども、最終的な部分ではその意図を超えた部分で、自分が操り人形のようになってかつそういう部分も自分の中に深い深い意図として持っているような瞬間をそこに実現させていかなきゃいけない。

それを見たかそのことを感じた殆どの人が感銘を受ける訳であって、そこに意図を超えた大きな力、偉大な力みたいなものが感じられて、選手を通してそういう風なものが見えて来て羽生結弦くんであるとか、大坂なおみさんであるとかそういう人を超えて大きいものが働いて現実のplayにそれがなって、そこの1つ1つの、たとえば、その場の佇まいというのか、意図していたか意図していないのか分からないような絶妙な何かがある訳であるのだ。相手の選手が抗議をしている間にも自身は後ろを向いて瞑想しているかのような状態の中にいたためにそういう状況と関係せずにplayに集中することが出来たというのも、結果そうなった訳だけれども絶妙な何かがあった。

こっちが物凄く攻撃的にaggressiveにいったら、こっちは何にも無の世界にこう入り込んでいるみたいな。そういうことをその場にいた観客たちは、全部こう感じ取っている。

その場にいて。T.V.はそれを切り取りながら写すのでspotを当てるようにして抗議の場面とか、選手の後ろを向いている姿とか後からそれを切り取って、視聴者に対して見せる訳だけれど、そういう風なものが一種の舞台のようなものなので、現場にいる人には一緒に同時に「ばーん」と発信している訳であるのだ。そういう中でplayが金メダルのplayが最終的に勝利をするというのを見た時に、何か大坂選手を超えた何かの導きによってそこまで導かれたというのか何か物凄く奥深い何かを感じる。

単に上手である実力を超えた何かが働いているというのはやっぱり感じたんじゃないのか。

それを最高のplayというのは、言いたいことはですね、能の最高のplayも、tennisの最高のplayも、figureの最高のplayも究極的には同じだということであり、実際に彼らが世阿弥のことを知らなくても、究極的に人に「わっ」と「凄いな」と思わせているところには何か共通の構造があるということだと思う。

それを世阿弥は演出家であり同時に思想家でもあるので、そこを明晰に言葉に表した訳で言っていることは矛盾だらけのように見えるけれど、言いたいことは非常に明晰で、この「しない」というのは一種の空白「ひま」であり、この「ひま」ということは、playをしていない間で、大坂選手で言えばあの物凄い渾身の力でserveをするという表には出ていない、その前の段階とかその「間」の段階。

そういう風なところをどういう風にしていくかがplayに現れて来るのだ。全部に繋がっていくのだ。

その「間」の部分をどういうこころを持って繋いでいくのか、こころを捨てないで用心を持つ、ずっとその緊張感を持っていなければいけない訳である。

でも緊張感を持っているという意識を自分が持っていてもいけなくて、ある種無心のようになって、soccerで最高のplayをする時には「こころがあって無いような」「身体が勝手にそこに動いているような」絶妙な身体動作と場のmatchingみたいなものがあると思うし、一流選手の一流の競技は全てがそうであろう。そういう自分の計らいのようなもの「計算」を超えて、「ばちっ」と決まる瞬間に自分がたまたまというのか必然的にそこにいる、それによって最高のplayが出来るのだ。

こういう最高のplayになる時の内心の状態をここで「無心の位にて、わが心をわれにも隠す」という言い方で表している。自分のこころを自分で隠すということは自分のこころは自分で分かっている訳だから論理的に言って無理であるが、自分のこころを自分で隠すという無心の状態に自分がなっていないと駄目だと。

そういう状態であらゆる動作をあらゆる身体行為を全部こころが繋いでいる。深いこころが繋いでいる。静かな境地が繋いでいるのだ。

手術の神様もきっとそうじゃないですか。

難しい手術をする時にも、全ての知能、技能、技量を動かしてやる訳じゃないですか。

でもそれだけではない、絶妙な生体の状態、手術を受ける人の身体の動きとか病気の具合であるとか、切り取っていく時の出血の度合いであるとか、色んなものの組み合わせを瞬時・瞬時に感じ判断しながら行為をしていかなきゃいけない訳じゃないですか。本当に上手な術者は、最高のplayerと似たような何かに導かれるようにして、そういう状態になるようなね。

**3、****鎌田先生の「こころの科学入門」にまつわる話題**

要するに、今必要なのは、知識ではなくて問題の浮かび上がらせ方というか、捉え方とか、問題がどういう問題なのかということをcatchする能力というか感性だと思うんですね。

それはある種のimaginationでもありlogicでもあるんだけど、そういうようなものが問題として「パーッ」と見えて来るような地平を自分がどう、芸術もそうでしょう。

そういう構図みたいなものが自分の中で見えて来ないと、それは創作にも繋がらないし、また、解釈にも繋がっていかないし新しいものにならない。

**4、これからの生き方・逝き方について**

要するに、大問題なんだよね。これからの逝き方も。死に方ね。

これからの少子高齢化の時代の中で、多死時代を迎えて、災害のような時代も多いし、70歳以上、75歳以上の高齢者の死の問題も本当に病院でもう看取れない訳だよね。

そういう中でどうやってcareして地域包括ケアというのを国をあげてやろうとしているけれど、それもまた難しい訳でしょ。

簡単なことじゃない。そういう中で、人々の心の中には「悲嘆」は深くなる一方じゃないですか。

今、どんどんどんどん悲嘆は高まっているんですよ。

子どもも、老人も。それから今働いている大人も色んなしわ寄せで辛い辛い面はどんどんstressも深まっていっているんですよ。

そういう中で、careの問題っていうのは、グリーフケアを含めてですねスピリチュアルケアとか様々なcareというのは本当に重要な世界的に必要なものになって来て、どういうcareをできるのかということがこれからの社会を上手く生きていくために、存続をさせていくために必要な。

その時に芸能みたいなことは、hip hopもそうだけれど、非常に重要な役割を果たすことは間違いない。

教育というのも「教」「育」というけれど、ある面では非常にcare的なんですよ。教育関係というのは。宗教もcare的なんですよ。

それまでcareという観点から宗教を余り見なかったけれど、宗教は信仰みたいな面から見ていて、芸術は表現みたいな面から見ていたけれど、実は芸術も宗教も非常にcare的なものであるという観点を取り込みながらこれから先の未来というのをどうね作り上げていくのか。

たとえば、神社とかお寺というのはcare centerみたいな部分を実際にcommunityの中で果たして来たんですよ。お祭りが相互careじゃないですか。組織の。Communityの。

そういう役割を今までと違う観点から「ばちっ」と身心変容技法もそうだけれど、繋ぐこと。

1つの糸で繋いでみたら「そうですね。」ということがもっともっと見えて来て、人の技量だけの問題ではなく、色んなところへとそれが繋がっていく。

**5、身心変容技法研究会の図について**

身心変容技法研究会の図が1つあってね、下から色々な木が生えて来ている。

その中核のところに「教育」・「ケア」・「セラピー」っていう一つの枠があるんですけど、「教育」と「ケア」と「セラピー」みたいなものは一繋がりの中にあって、それをもう1つ特化したもの、より身体的に生理学的に特化したものは「医療」だと思うんですよね。

**6、先生の雰囲気、環境と教育について**

先生の雰囲気は大きい。親と先生に似て来るよね、どうしてもね。だから大学もそうで「おもろい」先生がいたら、良い学生が育つのは1つの。

だから全ての人がそうじゃないですか。

能の世界だってそうじゃないですか。

そういう「おもろい」人がいたらそういう部分はある種、担保されるというか。そういう環境がね、生まれる訳だから。

**7、次回の日程について**

来月の日程を。来月は何日。

第4だったら23日ですけど。はい。

23日にしてもらいましょうか。

18時から、この日はここでworkshopがありますので楽屋の2階になります。はい。

**三、感想および考察と次回の予定に関して**

① 9月の世阿弥研究会では『世阿弥能楽論集』「花鏡」から「万能綰二一心一事」(万能を一心につなぐこと)(219頁後ろから2行目～221頁10行目)の講読が行われた。

② この概念は世阿弥が最も伝えたかった重要なこと「花鏡」の伝書の中の極めて重要な概念なのであって、全ての舞台や芸術や表現などにはあらゆるものを超越して貫く意図(糸)のようなものが無ければならず「せぬところが面白い」「わが心、われにも隠す」というような絶妙の境地に入っていなければ人に感動を与えられる優れた表現はできないのだという論が展開をされていた。

③ そこからtennisやfigure skateなどで人に感動を与えるplay(演技)は究極的には同じであって、そこに共通の構造があり、「せぬところ」すなわち「しない」という「一種の空白、ひま」であるが、そこでどういう風にしていくかが全てのplayに繋がって、その「間」の部分をどのようなこころの状態を持って繋いでいくのか、緊張感を維持することが出来るかどうかが大事であるということも確認されていた。

④ そして「せぬところ」すなわち「空白の部分」であっても良い緊張感を維持して深い部分でこころを繋ぎ、自分の意図を超えた大いなる意図の中で自分がいつも練習をしている最高の演技の事だけに集中する、まさに無心になって取り組むことの重要性について考えさせられたように思われる。

⑤ 10月の世阿弥研究会の日程は10月23日(火)で、18時より河村能舞台の楽屋の2階で行われる。

講読は『世阿弥能楽論集』「花鏡」の222頁5行目「妙所之事」(妙所のこと)からである。

**参考文献・資料一覧**

① 小西甚一編訳『世阿弥能楽論集』「花鏡」たちばな出版, 2004, pp.188～238.

② 小林責／西哲生／羽田昶著『能楽大事典』筑摩書房, 2012.

「河村隆司」pp.214～215、「石橋」pp.440～441、「野宮」p.699、「富士太鼓」p.775～776.

「曲見」p.440,「深井」p.766～767、「藤田六郎兵衛【十一世】」p.777.「妙所」pp.861～862.

③ 西野春雄,羽田昶編集委員『【新訂増補】能・狂言事典』平凡社,1999.

「石橋」p.72、「野宮」p.117、「富士太鼓」p.129、「曲見」「深井」p.345, p.346⑪.

④ 小林保治,森田拾史郎編『能・狂言事図典』小学館,1999.

「石橋」p.17,p.77,p.142,p.158、「野宮」p.16,p.100,p.132,p.222、「富士太鼓」p.17,p.164、「曲見」p.43.

⑤ 丸岡明 著『能楽鑑賞事典』河出書房新社1961.

「石橋」pp.210～212、「野宮」pp.312～313、「富士太鼓」pp.338～339、「曲見」・「深井」p.58.

⑥ 高田明著『高田明と読む世阿弥　昨日の自分を超えていく』日経BP社,2018.

⑦ 安田登著『異界を旅する能　ワキという存在』(ちくま文庫) 筑摩書房,2011.

⑧ 矢追純一著『カラスの死骸はなぜ見あたらないのか―あなたの常識がひっくり返る本』雄鶏社,1993.

⑨ 「福島孝徳先生インタビュー すべてを患者さんのために（福島孝徳＋吉川左紀子＋鎌田東二＋阿部修士）」「こころの未来」第10号pp.2～11.

http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokoronomirai/kokoro\_vol.10.pdf　閲覧日時、2018年10月1日(月).

⑩ 「片山定期能　京都・岡崎エリアの総合情報サイト　京都岡崎コンンシェルジュ　2018/09/16（日）片山定期能」http://www.kyoto-okazaki.jp/event/20180814011839　閲覧日時、2018年9月28日(金).

⑪ 「藤田六郎兵衛氏が死去　能楽笛方藤田流宗家」日本経済新聞8月29日(水).

https://www.nikkei.com/article/DGXMZO34721940Z20C18A8CN0000/

閲覧日時、2018年9月28日(金).

⑫ 心技体の研究01 「万能を一心にてつなぐ感力なり」（世阿弥『花境』1424年頃）

http://amwconsulting.co.jp/column/other/心技体の研究01-「万能を一心にてつなぐ感力なり/

閲覧日時、2018年9月29日(土).

⑬ 北海道地震を激甚指定　政府　台風19～21号も

「京都新聞夕刊」9月28日(金)7面

⑭ 北海道地震・台風へ支援策　　政府　観光など予備費153億円

「京都新聞」9月29日(土)5面.

⑮ 心に響く厳かな「まじない」ことばの魔術　＜とうとうたらりたらりら＞(能「翁」)22面

「読売新聞」9月26日(水)22面.

⑯ 能楽ごよみ10月　開館60年祝う京都観世能　「京都新聞」9月27日(木)7面.

⑰ 「魂絞る」能の神髄を　京都観世会館60年

毎月の例会、たっぷり「三番立て」主軸に

オール京都で節目祝う　21日と28日に記念公演　復曲やファン開拓の新趣向も

「京都新聞」10月1日(月)9面.

⑯ 「樹木希林さんにファンらお別れ」「読売新聞」10月1日(月)32面.

⑰ 台風24号　計画運休休日の街閑散　関空滑走路閉鎖326便欠航

「非常に強い」黒潮に沿い勢力維持「読売新聞」10月1日(月)32面.

⑱ 「文化芸術創造拠点・京都プロジェクト　能×AR技術」

http://culture-project.kyoto/event/project/detail/1513321580.9993.html

閲覧日時、2018年10月2日(火).

⑲ 「時代祭2018 | 京都観光情報 KYOTOdesign」

https://kyoto-design.jp/special/jidaimatsuri

閲覧日時、2018年10月2日(火)

⑳ 「本庶氏ノーベル賞」医学生理学　がん免疫療法開発　京大特別教授オプジーボ主導

米学者と共同受賞　ブレーキ外す新視点」「京都新聞」2018年10月2日(火)1面.

「がん治療新たな道」、「京都新聞」2018年10月2日(火)、2面.

「日本免疫学実力示す」「本庶氏ノーベル医学生理学賞」、3面.

「本庶さんノーベル賞　熱き思いリスク恐れず」「何知りたい」自問自答、4面.

「革新の研究者金字塔命の薬評価に喜び　未来の患者救う」、30面、31面.

受賞「とにかく驚いた　同級生をがんで亡くした思い忘れず」31面.

「吉報、拍手響き渡る　本庶さん自ら学生らに伝達　研究室」、31面.

「本庶氏ノーベル賞　生理学・医学　がん免疫療法に道　治療薬オプジーボ実用化」

「少数派が成果生む」「読売新聞」10月2日(火)、1面.

「がん治療発想転換　本庶氏ノーベル賞　免疫へのブレーキ外す」、3面.

「産学連携偉業後押し　本庶氏ノーベル賞　小野薬品地道に共同研究」、7面.

「ノーベル生理学・医学賞　電話対談　研究ほど楽しい人生ない」、8面.

「がんに挑み患者救う　疑う姿勢原点」、30面、31面.

「本庶氏ノーベル賞一夜明け会見　サイエンス未来への投資」

「京都新聞夕刊」10月2日(火)、1面.

「1日の本庶氏ノーベル賞会見詳細」、7面.

「幸福な人生」家族に感謝、本庶氏ノーベル賞　妻「とことん究める性格」9面.

「基礎研究振興へ基金　ノーベル賞・本庶氏、賞金で」

「日本経済新聞夕刊」10月2日(火)、1面.

「患者の役に立ち幸せ」がん治療貢献、本庶氏を称賛　ノーベル賞共同受賞アリソン氏

「日本経済新聞夕刊」10月2日(火)、3面.

西沢正史企画・監修 ; 上原作和編集『人物で読む源氏物語;第7巻　六条御息所』勉誠出版,2005.